We Start Kids' Elite Programme

JAPAN FOOTBALL ASSOCIATION

財団法人 日本サッカー協会
キッズ年代エリートプログラム

犬飼 基昭●(財)日本サッカー協会 会長

芸術や音楽はもちろん、スポーツの分野でもゴルフや水泳といった個人競技では小さいうちから英才教育を施すことが盛んに行われてきました。しかし、こと団体競技では“エリート育成”と聞いて抵抗感を持つ人が少なくありません。

我々スポーツ団体としては、多くの子どもたちに平等に機会を提供する一方で、潜在的な能力を持った子どもの才能をさらに伸ばすチャンスや環境を与えることが大事だと考えています。

日本サッカー協会(JFA)が推進するこの「キッズエリートプログラム」は、子どもたちが持つ“個”や“才能”を早期に発見し、子どもたちの年齢や成長に合ったスポーツ指導を施しながらレベルアップさせていくものです。しかし、“エリート”だからといって厳しい訓練やトレーニングを施すものではなく、子どもたちが楽しくスポーツをする中で健全な心と身体を育み、持てる能力をさらに向上できるようその後押しをしたいと考えています。

核家族化や少子化、外遊びの減少などで豊かな人間性や社会性を育む機会や場が減った現代の子どもたち。スポーツは挫折に負けない強い心を育み、マナーや協調性、社会性を培うものとして、これからの青少年の育成に重要な役割を担っていくでしょう。

日本のスポーツが国際舞台に進出するようになった今、運動能力に優れているだけでは世界トップレベルとして活躍し続けることはできません。これはサッカーに限らず、芸術や経済でも同様で、きちんと育成された人材が日本の未来をリードしていけるものなのです。

JFAは、このキッズエリートプログラムの趣旨を多くの人に理解していただき、日本中の子どもたちの健やかな成長とエリートの輩出に寄与していきたいと願っています。

We Start Kids' Elite Programme
JAPAN FOOTBALL ASSOCIATION

Contents 目次

ごあいさつ 02

日本サッカー協会の取り組み 04
―キッズ年代へのはたらきかけ―

「早期エリート教育」の考え方について 08

JFAエリート養成システム構築の試み 12

おわりに 15

日本サッカー協会の取り組み
―キッズ年代へのはたらきかけ―

世界トップ10を目指して ―三位一体＋普及―

日本サッカー協会では、JFA2005年宣言にて**「2015年、世界トップ10を目指す」**という大目標を掲げました。

それを実現するために、従来から掲げている**「三位一体の強化策」に「普及」をプラス**しました。すなわち、従来から、代表チームの強化ばかりでなくユース育成、そしてそれを指導する指導者の養成が一体となった総合力向上を目指してきましたが、それだけでは不十分で、強化・育成と普及の両方を重視していくということです。

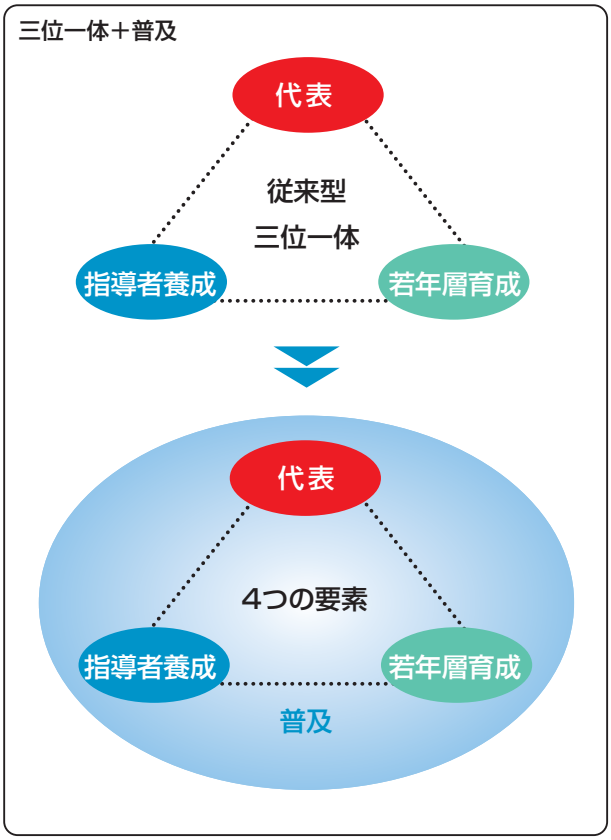
普及により、すそ野を広げ、広くて堅固なベースを基に高い山を築くこと。

キッズを中心としたグラスルーツへ働きかけて、生涯サッカーを愛し、楽しむ人たちを増やすこと、そのことがサッカー全体を支える大きな力になると考えています。

2003年度より、「キッズプログラム」、レディースフットボール、ファミリーフットサル等の普及につとめ、日本サッカー界を大きく包んで支える力を得ています。

普及および強化・育成は、日本サッカー協会の使命です。

この両輪の上に日本サッカーの発展があります。



JFAキッズプログラム

2002年、世界最大のスポーツイベント、FIFAワールドカップが日本で開催され、日本中で多くのこどもたちがサッカーに出会い、興奮、熱狂し、大きな夢を抱きました。扉を開いたこどもたちにその夢に見合った環境を用意すべく、2003年度より、キッズプログラムを展開しています。

多くのこどもたちにサッカーとの良い出会いを提供するための環境作りに取り組み、現在多くのこどもたちが外で身体を動かし、サッカー遊びを楽しんでいます。低年齢のための指導のガイドラインを作成し、また指導者を養成、フェスティバルの開催、巡回指導その他、多くの取り組みが地域に定着し始めています。

普及により、**しっかりとしたベースを築く**こと。これは、私たちにとって、核となる取り組みとして、今後も積極的に継続していきます。

これが私たちの大前提です。

そのベースの上に

普及によるベースの充実という大前提の上に立ち、まだまだより多くのこどもたちにサッカーやスポーツとの出会いの場を充実させていく必要性を痛感する一方で、年代が低いほど、潜在的なタレントが実にたくさんいるという認識にいたりました。

発育発達の観点から、**幼児期の外遊びや多種多様な運動経験が、将来の成長に非常に大きな影響を与える**ことがわかっています。サッカーはさまざまな動きが含まれる複合的な運動である一方で、ボールを足で扱うという特殊な技能を要します。これは、大人になってからはじめてやるのでは難しいのですが、こどものときであれば身につきやすく、またそれは一時的なものではなく将来に続くものとなります。そのため、以下の2点のトライが必要となると考えました。

❶潜在的な能力の高いこどもたちに、年齢や成長に合った、良い環境と指導を与える。

❷可能性があると思われるタレントを把握し、成長の過程をモニターし、必要に応じて働きかけることのできる体制をつくる。

キッズ年代（U-6〜U-10）の早期エリート教育の検討・実施

タイガー・ウッズ、北島康介、イチロー、福原愛、谷亮子、吉田沙保里、鹿島丈博…　キッズ年代から専門的なインテンシブな取り組みをして世界的に成功した例もあります。彼等は幼稚園年代あるいは小学校低学年でその種目を開始しています。ただし、これらは主に個人競技での事例であり、チームスポーツであるサッカーとは異なる部分もあるかもしれません。

しかし、ブラジルの選手たちが、どうしてあのような技術を備えているのでしょうか。もちろん、ストリートサッカーの中で身につけ磨かれていったものが多いと思いますが、小さい頃からボールに接して過ごす時間を非常に多くとっているのです。

次ページに示すとおり、世界的なサッカー選手の多くは、ヨチヨチ歩きの頃からボールを追いかけていた選手たちです。こどもの頃からボールに触れていた経験が、成長に大きく影響を与えていることは間違いありません。

名前	種目	開始年齢
イアン・ソープ	水泳	5歳
タイガー・ウッズ	ゴルフ	2歳
イチロー	野球	3歳
北島　康介	水泳	5歳
柴田　亜衣	水泳	3歳
谷　　亮子	柔道	8歳
井上　康生	柔道	5歳
野村　忠宏	柔道	5歳
上野　雅恵	柔道	7歳
鹿島　丈博	体操競技	3歳
米田　　功	体操競技	8歳
富田　洋之	体操競技	8歳
吉田沙保里	レスリング	3歳
福原　　愛	卓球	3歳
田臥　勇太	バスケット	8歳

ペレ

「ブラジル人は立つことを覚えるやいなや、キックすることを習う。歩くのはその後」といわれるほどサッカー好きの国民である。子供たちは自然にサッカー遊びをはじめ、サッカーを身につけてしまう。私もご多分にもれず、サッカーにとりつかれたのだ。
とはいっても、私たちはちゃんとしたボールを手に入れることはできなかった。そこで代用品のボールをつくった。…私たちのサッカー場は、家のそばの通りであった。“靴下ボール”はやむをえぬ代用品ではあったが、けっこう子供たちの技術向上には役立った。

「ペレ自伝　サッカーわが人生」エドソン・ペレ講談社

ジーコ

幼い頃、私たち兄弟は家に面した石畳のルシンダ・バルボーザ通りで毎日のようにサッカーに興じていた。夕方仕事帰りの父は、そんな私たちを見つけるやいなや大声で怒鳴ったものだ。

「ジーコ自伝『神様』と呼ばれて」ジーコ朝日新聞社

ディエゴ・マラドーナ

1966年、5歳になっていたディエゴは父親の期待どおり、サッカー漬けの生活をしていた。父親は相当無理をして皮製の本物のボールを買い与えていたが、これはディエゴ少年の宝物で、空き地で近所の子供が集ってサッカーをするときには空きカンやボロぎれを丸めたものがボールの役割を果たしていた。

「世界のサッカー」大住　良之三一書房

ロナウド

ダダード（ロナウドのあだ名）はトランプにも、風船にも、おもちゃにもまるで興味を示さない子だったが、ボールを見たときだけニコッと笑った。…道でも、広場でも、草ぼうぼうの野原でも、土埃の舞うグラウンドでも、砂浜でも、家の中でも、ロナウドはどこでもボールを蹴っていた。
サンタクロースがプレゼントに本物の革のボールを持ってきてくれることを何年も待ちつづけ、初めてそれを手にしたときは、あまりの嬉しさにしばらくずっと躁状態だった。リフティングは軽く200回を超え、友達は皆それをうっとりと眺めていた。彼の行くところにはいつでもポンポンとボールを蹴る音がしていた。

「王者ロナウド」エンツォ・カターニア株式会社潮出版社

ドゥンガ

1963年10月、私はそのポルト・アレグレからさらに450キロほど離れた、ウルグアイとの国境に近い小さな町に生まれた。そして歩き出すのと同時に、ボールを蹴り始めた。
…家の前には道をはさんで2メートルほどの壁があり、私は毎日その壁を目がけてボールを蹴っていた。

「セレソン」ドゥンガ日本放送出版協会

デイヴィッド・ベッカム

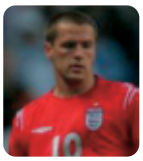
ぼくのスキルは地元の公園で父とともに学んだ歳月のたまものだ。人の成長は育った環境でどうにでもなる。…父はぼくにテクニックの大切さを教えてくれた。ぼくが子供たちに教える立場に立つとしたら、プレーの楽しさとスキルを身につける楽しさを一番に据えるつもりだ。それが父とプレーしたことの一番の恩恵だった。

「ベッカム　すべては美しく勝つために」デイヴィッド・ベッカムPHP研究所

ロナウジーニョ

サッカー好きだった父ジョアンは駐車場の管理人として生計を立て、父と兄アシスの影響で、ロナウジーニョは物心つく頃から自然とボールを蹴っていたのだという。

「ワールドサッカーすごいヤツ全集 2005～2006」
金子義仁 フットワーク出版社



マイケル・オーウェン

そんな父（エヴァートンなどでプレイしたプロのサッカー選手だった人物）にとって、息子マイケルは宝物であり、自分の夢だった。現役も終わりに近づいた頃、息子に自分のプレイを見せ、6歳になるオーウェン自身も「プロのサッカー選手になりたい」という夢を抱くようになっていた．…
ただし、父は息子にサッカーだけでなく、様々なスポーツを経験させた。ボクシングやゴルフなど、その全てで息子マイケルは優秀な成績を収めていく。だが、彼が最も運動能力を発揮できるスポーツは、やはりサッカーでしかなかった。

「ワールドサッカーすごいヤツ全集 2005～2006」
金子義仁 フットワーク出版社

最適なプログラムで個を伸ばす

私たちは、特別なスパルタ教育を展開するつもりもありませんし、魔法のテクニックを展開できるとも思っていません。

今まで何も手をつけてこなかったこの年代に、キッズプログラム、キッズサッカーフェスティバル等でサッカーとの出会いの機会と刺激を与え、その上で楽しみながらサッカーに親しみ、ボール扱いをたくさん経験させることで、この時期に特に伸びやすい個の能力を伸ばすことにトライしたいと考えています。

「早期エリート教育」という言葉には「イメージ」として、極端に絞り込んだ上で、「厳しく」「限定的に」「集中的に」「長時間にわたる」指導を行う、という印象を持たれるかもしれませんが、それは必ずしも本来この言葉に伴う意味ではありません。私たちは、**その年代のこどもに最適な質の高い指導**をしようと考えています。

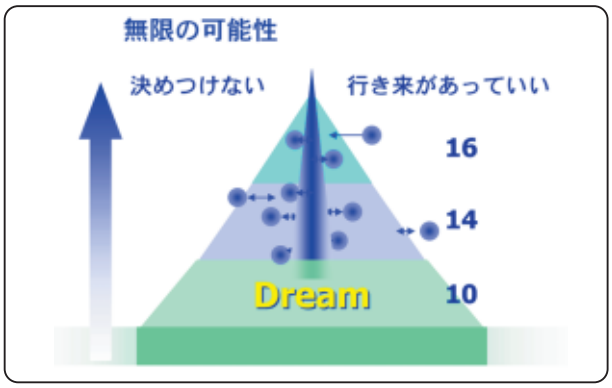
さまざまな経験が有用

サッカーはさまざまな方向に動いたり、足でボールを扱う等、スポーツの基本となる総合的な動作が多く含まれます。特定の動作が回数多く反復されるのではなく、移り変わる局面の中で、実にさまざまな対応や動きが必要になるというのが特徴です。

水泳のイアン・ソープ、テニスのボリス・ベッカー、陸上競技の末続慎吾、柔道の鈴木桂治等は、それぞれ、自分の種目で世界的な活躍をしているおなじみの選手たちですが、彼等はこどもの頃にサッカーをしています。こども時代のサッカーを通して、世界のトップアスリートになった選手です。自分の種目一筋に明け暮れてきたものと思っていた人々は意外に思われるかもしれません。

こどものうちから、サッカーだけをやればいい、とは決して思っていません。他のスポーツにも大いに触れてほしいと思いますし、スポーツ以外の遊びも非常に大切であると考えています。その方が、人としてのバランスの面でも、スポーツの面でも、より良い成長が期待できると考えています。

何歳からどのようなことをやるのがいいのかを含め、検討を開始し、この特有の年代の特徴を踏まえ、最適な環境を整備していきます。



行き来があっていい

この年代で選ばれなかったからといって、可能性がないわけではありません。反対に、この年代で選ばれたからといって、それで将来が保証されるわけではありません。将来に向けてさまざまな可能性が広がっています。

プレジデンツ・ミッション5 エリート養成システムの確立

主旨：
強化に重点を置いた取り組みとして、各年代に則したエリート教育の実施に向けてさまざまな検討を行う。特に、キッズ（U-10・U-8・U-6）年代からのタレント発掘／養成活動を都道府県レベルで積極的に展開し、エリート教育を通じ、選手の個の強化に努める。更に、U-12以降のエリート教育も積極的に推進し、トレセン制度やJFAエリートプログラム等、日本代表の強化に直結した日本独自の一貫したエリート養成システムを確立する。また、トップレベルの選手になり得なかった場合にも、自分自身に誇りを持ち、実社会に貢献できる人間教育を行える仕組み作りを目指す。

キッズ年代（U-10・U-8・U-6）のエリート教育の検討・実施
- キッズ年代のエリート教育に関する意義の浸透・アピール
- 具体的実施プログラムの策定・実施
- タレント発掘／養成活動
- 各種調査・研究
- リーグ戦・各種イベント等の実施(受け皿作り)
- 適切な指導者の養成・活用
- 保護者への啓発活動
- トレセンとの連携
- Jリーグアカデミーとの連携

「早期エリート教育」の考え方について

わが国での一般的考え方

「わが国では、英才教育は今日もなおタブー視されている。英才教育は、戦前のエリート教育の復活である、英才教育は普通児や劣等児を粗末に扱うから差別教育である、という意見が教育界を支配している。」

清水義弘、向坊隆編「英才教育」1969年

「わが国では先天的な素質や才能よりも努力といった後天的な要因を評価する能力観や教育機会の平等性を重視する教育観が根強く、明治末期にこの概念「英才教育」が導入されて以来、あまり積極的に試みられてこなかった。」

『教育用語事典』1995年

私たちが6歳くらいのこどもたちから能力の高い者に早期教育を開始しようということを表明すると、多くの人たちが敏感に反応しました。その意見は大きく以下の3点にまとめることができます。

❶こどもたちにあまりに早い時期から押し付けがましいトレーニングをすることは心身の発達上問題があるのでは？

❷こどもはどう育つかわからないのに、早期に適切に選抜できるのか？

❸早期に選抜されることで、落とされたこどもたちが挫折感を味わいサッカーをやめてしまうのでは？

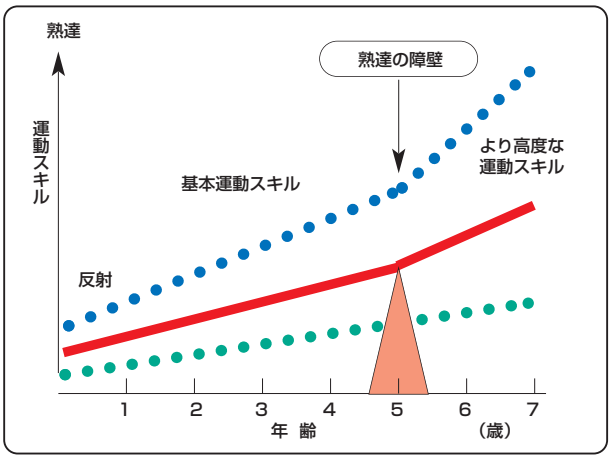
以下、それぞれの意見について、考えてみます。

❶こどもたちにあまりに早い時期から押しつけがましいトレーニングをすることは心身の発達上問題があるのでは？

→発育発達に適合した良い刺激を！

ブラジルでは、生まれてすぐにボールを与え、ヨチヨチ歩きのときからボールを蹴らせているといいます。多くのサッカー先進国では、このような光景が見られます。現在JFAで13、14歳を対象に行っているエリートプログラムに選ばれた選手の中に、元代表選手のこどもたちがいます。彼らは自分のこどもに小さいときからサッカーボールに触れさせ、サッカー遊びを楽しませて、いわゆる早期教育を行ってきているのです。

この年代のこどもたちに何も押しつけがましいサッカーを無理に指導し、この年代で擦り切れてしまうようなプログラムを提供しようとは思っていません。システムや戦術を鍛え上げようとするものではありません。足で扱うという特殊な技術の必要なサ



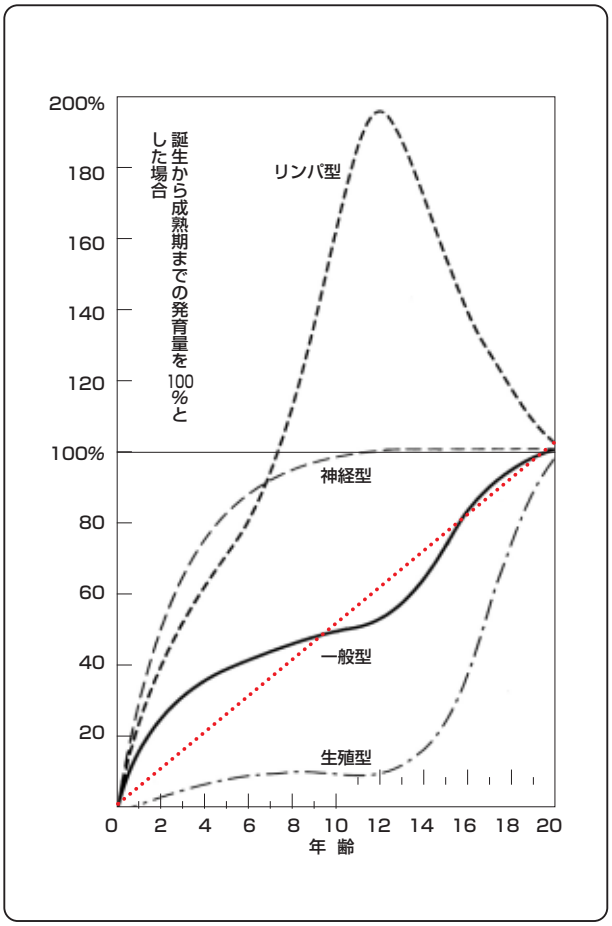
運動スキルの発達（宮下、1993年）
運動スキルの発達は、7歳頃から個人差が大きくなる。
要因として熟達の障壁の存在が考えられる。5歳頃までに基本運動スキルがマスターできていない子どもは、その障壁につまづきやすい。

ッカーにおいて、この年代でさまざまな刺激を与えることは、間違いなく将来的な技術習得にポジティブな影響をもたらします。

また、10年20年と長い時間サッカーをやらせることに意味があると言っているのではありません。6歳のこどもたちには6歳のこどもたちにこそ有効な刺激があり、そこが全くなされていないことでその子の将来の伸びを阻害することが問題であって、そこの部分を私たちは始めていきたいと考えているのです。

私たちは、才能あるこどもたち、将来開花するかもしれないこどもたちに、良い刺激を与えたいと思っているだけなのです。「早期教育」、早期から良い教育をすること自体に何か問題があるでしょうか？

発育発達の観点から、この年代のこどもたちの心身に適した内容と量を吟味し、楽しみながらこどもたちにプラスとなる刺激が与えられるようにしていきます。



スキャモンの発育発達曲線（スキャモン,1930年）
6歳で神経系は大人の90%

❷こどもはどう育つかわからないのに、早期に適切に選抜できるのか？
→この年代にはタレントはたくさんいます！

まず、選びきれるのか、という問題について。

この年代で、20人のこどもたちがいれば、3〜4名の誰が見ても才能があると思われるこどもたちがいます。この年代でもある程度の判別は可能です。ただし、可能性を秘めたこどもたちはたくさんおり、**低年齢での判別はきわめて母集団の多いもの**となります。可能性あるなるべく多くのこどもたちに良い指導を提供していきます。

また、ピックアップされない中にも才能あるこどもたちがいるのではないかという点もあります。もちろん、早期であるほど判別は難しく、そこからもれることもあるに違いありません。あとからその才能を輝かせるこどもたちがいることも認めるところです。しかし、だからといって、早期教育をやめろという話にはならないと思います。

潜在的なタレントは小さいときにこんなにたくさんいるのに成長するにつれて減っていきます。これにはもちろんさまざまな要因があると思います。その要因のひとつである「成長の過程で良い環境や指導を与えられる機会がなかった」という部分を解消したいと考えているのです。

「英才教育は差別教育というが、果たしてそうか。英才教育は、英才だけを特別扱いにする教育ではないのである。（中略）一人一人の子どもの能力を、最大限に伸ばすという民主教育の観点からすれば、英才に対する配慮も当然必要である。英才だけを放置してよいということはないはずである。」

宮下充正『子どものスポーツと才能教育』2002年

❸早期に選抜されることで、落とされたこどもたちが挫折感を味わいサッカーをやめてしまうのでは？
→大人の価値観ではありませんか？

誰にでも同じように「スポーツ・サッカー」を楽しむ権利があります。

選ばれなかったこどもたちが挫折感を味わうのではないか、また、何も残らないのではないか、という点ですが、これはこどもたちではなく、親の価値観ではないでしょうか。弱いチームでもサッカーを楽しんでいるこどもたちがいます。中学や高校でも、実力差はトップと比べて明らかでも、実に多くの生徒たちがサッカーを楽しんでいます。

音楽では早期英才教育が当然のこととして行われています。バイオリンをこどもの時に習ったこどもたちが超一流のバイオリニストにならないと、「何も残らない」のでしょうか。一生音楽に親しむという下地ができます。

一方で、才能あるこどもたちに何もしないことによって彼らの可能性の芽を摘んでしまうこともありうるのです。同じように才能が重要である芸術という分野で、早期英才教育を行っていることに対して批判が出ているのでしょうか。やらないと世界の一流に到達できないということを考慮し、才能の発掘と早期教育が実践されています。

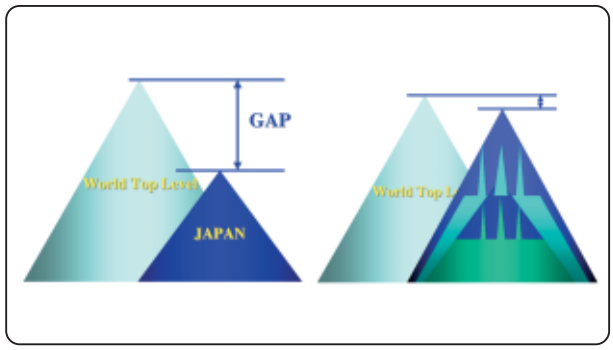
そう考えると、スポーツは過剰な反応を受けているように感じます。なぜ、選ばれなかったらそれで全てを否定されたとし、おもしろくない、傷つく、やめる、見込みがないからやめさせる、という感覚になるのでしょうか。誰にでも同じようにスポーツ、サッカーを「楽しむ権利」があります。それを否定するものでは決してありません。

こども自身、悔しい思いはするかもしれません。それは生きていくうえで多かれ少なかれさまざまな場面で経験することであり、悔しい思いも大切な成長の糧です。サッカーをやる場が消えてなくなるわけではありません。楽しくサッカーを続けていくことができるでしょう。深い挫折感を味わい、ものにならないという判断を下してしまうのは、むしろ大人ではないのでしょうか。

〉〉〉「ボトムアップ」と「プルアップ」

レベルアップには**「ボトムアップ」**と**「プルアップ」**があります。ボトムアップは平等主義で行う教育のように、全体のレベルを上げることに大いに役立ちます。プルアップは才能のあるこどもたちのレベルを上げることによって、全体のレベルを引き上げることです。集団のレベルアップには、その**両方が必要**です。残念ながら、日本には、このプルアップ教育のシステムが欠けています。

プルアップがなされていれば、仮に後から才能を開花させる子がいたとしても、より高い基準をベースとし目標とすることで、十分にその差は埋めることができると思われます。



日本サッカー協会は世界のトップ10を目指しています。これは、後天的な努力のみで達成されるものではありません。先天的な能力のある者に良い環境を与え、本人が努力してはじめて育っていくものなのです。

世界のトップ10を目指すには、今までと同じ方法では間違いなく追いつきません。

「英才は育つものではなく育てられるものである」

清水義弘「英才教育」1969年

「選手は勝手には育たない。タレントが偶然育ってくるのを待つのもいいだろう。しかしそれでは永遠に待ちつづけることになるかもしれない。」

アンディ・ロクスブルク（UEFAテクニカル・ダイレクター）
第3回フットボールカンファレンス 2001年

気をつける事：本人・大人

低い年代でピックアップされたからといって、これが何を保証するものでもありません。それは、上の年代であっても同様です。本人も指導者も親も勘違いしないよう、プログラムの一環としてしっかりとした指導を行っていく必要があります。ピックアップの結果、本来の意図とは関係なく本人の勘違いや周囲の勘違いによってドロップアウトの原因となるようなことは、絶対に避けなければなりません。

ピックアップされることが励みにもなるかもしれませんが、プレッシャーになる場合もあります。特に大人が自分が果たせなかった夢をこどもに託して過度に期待するあまり、こどもにプレッシャーをかけてしまう場合があります。これは**「身代わりアスリート」**と呼ばれます。その結果、こどもは自分自身のためではなく、親を喜ばせるため、親をがっかりさせないためにプレーするようになってしまうのです。これは本来あるべき姿ではありません。

プレッシャーは、こどもたちのドロップアウトの原因のNO.1と言われています。選ばれたことがプレッシャーとなり、成長が妨げられたりサッカーへの取り組みがつらくなったりするようなことは、何としても防がなくてはなりません。

主役はこどもです。こどもが機会を得て伸びる可能性を、大人の思いでつぶしてはなりません。

ピックアップされたこどもたち自身には、このプログラムをとおして、対応できるように指導していきます。親にはこどもたちを最適にサポートしてもらえるように（それがその大人の本意なはずですから）指導していきます。

ただし、コントロールしきれないことが出てこないとも限りません。直接働きかけることのできない周囲が過剰な反応をすることもありえます。それに惑わされずに成長していけるようにするためには、近くにいる大人の理解と協力が不可欠です。一方で、選ばれなかったこどもの親が過剰な反応を示す場合があります。選ばれなかったこどもに対し、見込みがないと勝手に見切ってやめさせてしまうといったケースが残念ながら散見されます。それは二次的なことで、本来誰も意図するところではありません。

この意図を、ぜひ多くの人に分かっていただきたいと思っています。

指導者について

プレーヤーを育成するのは指導者であり、指導者のレベルアップが不可欠です。各年代の育成に適した指導者を養成することは非常に重要なことであり、養成の質・量の充実に取り組んでいます。

また、日本全体で育成に関するビジョンを共有することが不可欠であり、「ベクトル合わせ」の考え方で日本全体の底上げを図っています。

キッズ、ユース年代の指導者のあるべき姿、もつべきフィロソフィーを、指導者は理解していなくてはなりません。

こどもは時間をかけて、多くの年代を通過して、大人へと成長して行きます。そういった意味で、こどもの育成は、それぞれの年代を預かる多くの指導者のリレーになります。それぞれが、各年代で果たすべき育成の役割を果たし、次の年代の指導者へとバトンタッチしていくのです。

その時々の「勝った」「負けた」ではなく、**長期的視野に立ち、育成の全体像の中で**その時のこどもを預かり、最終の成長像を思い描きつつ、それを目指す上での自分の役割を果たしてリレーをし、**最終的に大成する選手を育成する、過程の一部**を担っていただきたいと思っています。「勝った」「負けた」だけではない、育成の価値を見出し、評価をし、最終的に大きく成長したプレーヤーの育成に携わった各年代の指導者の皆さん全てに、敬意を払います。

「プレーヤーズファースト！」という言葉を、私たちは大切にしています。何か迷ったときに、何か困難にぶつかったときに、立ち返る拠り所です。プレーヤーにとって何が一番良いのかを尺度にして、行動を決めていきます。

JFAエリート養成システム構築の試み

真の意味での「エリート」

将来日本をリードする人材を育成する今の社会、教育で欠けているもの

「エリート」という言葉は日本では非常に抵抗感が強いものですが、それはこの言葉の真の意味が誤解されていることによります。その結果遅れにつながり、誤った「平等主義」により、社会全体でレベルの低下と共にリーダー不在の状況が見られます。能力の高い者がなおざりにされ、伸びるはずの能力が伸ばせずにいるのが現状です。平等とは、「能力に応じた機会の平等」であるべきです。

真の意味のエリートとは、社会の各分野でのリーダーであり、特権階級ではなく、本来むしろ戦場で先頭に立って闘いに行く存在です。その者達には常に重大な社会的義務が伴います。能力の高い者は良い環境と指導を与えられ、社会に対する責任を果たす存在となるということです。

私たちはサッカー界で、真の意味でのエリートとなる人材を育てようとしています。それがサッカーでも判断力やリーダーシップの面で大いにプラスになります。また、サッカー界あるいはそれを越えた社会で将来的にリーダーとなりうる人材を育成したいと考えています。

リーダー不在、判断力不足は、現代の日本社会の大きな社会問題であるとも言えます。これに対し、私たちは、サッカー界の中でのアプローチを開始し、サッカー界から、スポーツ界から、社会に発信できればと思っています。

「世界基準」

スポーツ界は世界に眼を向けています。「世界」と闘う機会を持ち、常に「世界」を視野に入れています。

特にサッカーは、世界のスポーツとして世界中の多くの国々で行われており、日本代表はその中で世界トップ10を目指しています。したがって、ドメスティックな基準、自分の周辺、あるいは日本国内の「勝った」「負けた」ではなく、常に世界基準を視野に入れていかなくてはなりません。国内の日常のレベルで満足していては、世界には決して追いつくことはできません。

私たちのエリート教育の目標となる基準は、「世界基準」です。

「世界基準」で日本をリードし、サッカーのみならず、広くスポーツ界、社会全体に発信できる、トータルなリーダーシップをそなえた人材の育成を目指そうとしています。

日本におけるエリート養成システムの全体像

日本独自の一貫したエリート養成システムの確立

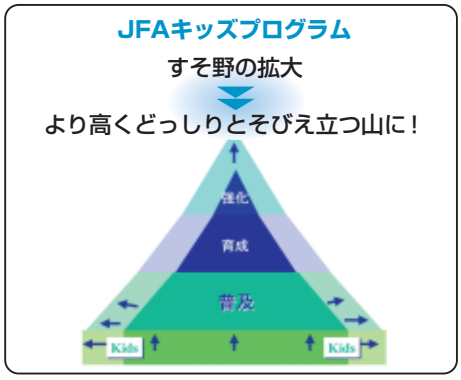
●「JFAキッズプログラム」

キッズプログラム＝土台。これがないところにエリートのみは無し。

U-6、U-8、U-10サッカーとの良い出会いを提供。

ハンドブック、指導ガイドラインの作成、指導者養成、フェスティバルの開催、巡回指導　他

→種まき、ベースを広げる普及



なるべく多くのこどもに、スポーツ・サッカーを好きになってもらう。

●キッズ年代エリートプログラム

キッズプログラムでサッカーに出会ったこどもたち、その中でも能力の高いこどもたちに対し、その年代に適したよい環境と指導を与え、将来の伸びを促す。また、こどもたちを把握し、成長の過程をモニタリングできるようにする。

●トレセン制度

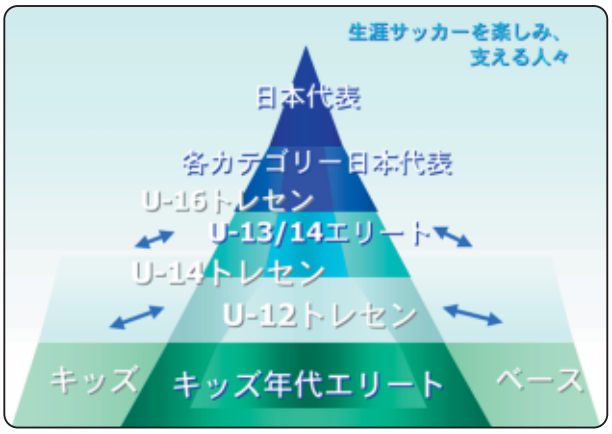
U-12、U-14、U-16を対象とした日本型発掘育成システム。地区→都道府県→地域→全国に至るシステムを形成する。
チーム強化ではなく「個の育成」を目標とし、能力の高い個に対し良い環境と指導を与え、天井効果を排除する。
U-12はタレントがたくさんいるという認識のもと9地域開催、U-14は3ヶ所開催、U-16は全国2ヶ所で開催している。発掘ばかりでなく双方向の流れを持ち、トレセンを介して全国にビジョンや情報を伝える機能も持つ。

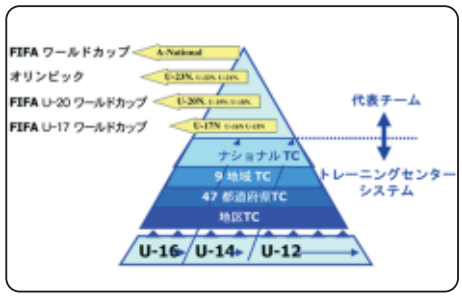
●中学生年代エリートプログラム

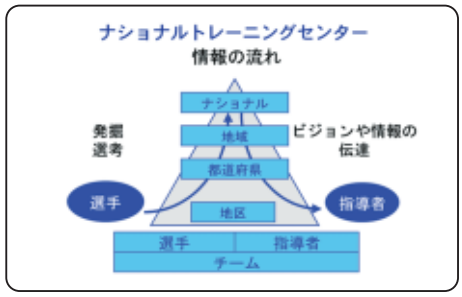
トレセンによるベースアップを受けて、「トップトップの育成」を目標に、2003年度より開始した。
年に4回のキャンプを行い、オフザピッチプログラムも含め、継続的に指導していく。

●ロジング

エリートプログラムを一歩進めた形として、実現へ向けて準備開始。寄宿制をとって、集中的に指導を行う。オンザピッチばかりでなくオフザピッチの指導を行う。
2006年4月より、JFAアカデミー福島を開校した。全国にユース育成のモデルを示す拠点として、さらなる展開を準備していく。







●中高一貫

長期一貫指導の考え方を、より理想的な形で実現するために、2006年4月開校のJFAアカデミー福島にてトライする。
ロジングで行うことにより、オンザピッチ、オフザピッチ両面での長期的視野に立った個の育成を行う。

●特別指定選手制度

能力の高い選手に能力に応じた良い環境を与え、成長を促す。
高校生年代、大学の選手がJリーグの試合に出場することを可能とし、高いレベルの切磋琢磨の中で更なる成長を促す。

●指導者養成制度

選手を育成するのは指導者であり、指導者のレベルアップが不可欠である。
各年代の育成に適した指導者の育成が重要である。
また、ビジョンの共有が不可欠であり、「ベクトル合わせ」の考え方で日本全体の底上げを図る。

世界トップ10を目指して
既存の基準から
さらなるステップ！

おわりに

田嶋　幸三●（財）日本サッカー協会 専務理事

「キッズエリート？」「何をするの？」「早いんじゃない？」

キッズ年代エリートに対する最初の印象は、どちらかというとネガティブな方向で受け取る方が多かったようです。

一方で、私たちもキッズプログラムの中で、早期専門教育はしないほうが良いと述べました。しかし、それに対し、何人かの指導者から「なぜそれがいけないのですか？」という疑問をぶつけられました。年代に関わらず、また早い時期から、その発育発達に即した良い教育を受けることを否定することはないのだと思い当たりました。

このリーフレットにも述べてきましたが、サッカーのワールドクラスの選手たちの多くが、何歳から始めたともわからない頃（歩き始める頃）からボールに触れています。また、父親がサッカーが好きでこどもの頃から当たり前にサッカーがごく身近にあった、という共通点があります。ヨーロッパや南米では当たり前のことかもしれません。私たちが行っている13歳、14歳のエリートプログラムにも、二世選手たちが選ばれるようになってきました。その父親たちに聞いてみると、こどもが小さいときからボールで一緒に遊んでいたということでした。本人たちもそれが早期の教育とは全く考えていませんでした。他のスポーツでも、小さいときからそのスポーツに適した環境の中で育成され、成功しているケースが多く見られます。

私たちがこれから世界トップ10というひとつの壁を乗り越えようとするときに、今までと同じ方法で良いのかというと、疑問です。才能ある選手を良い環境で育成し、本人の努力もあいまって、世界に通用する選手になっていくのです。私たちはこのキッズ年代エリートプログラムを始めることで、単に世界基準でプレーできる選手の出現を待つのではなく、その出現の可能性を上げていきたいと考えています。

発　行　財団法人 日本サッカー協会
〒113–8311 東京都文京区サッカー通り JFAハウス
TEL.03–3830–2004　FAX.03–3830–2005

編　集　財団法人 日本サッカー協会
プレジデンツ・ヘッドクォーターズ（PHQ）
技術委員会テクニカルハウス

制作協力　有限会社 ピーチ アンド ダムズン

印　刷　アサヒビジネス株式会社

●本紙掲載のレポート、写真、図表などの無断転載を禁じます。

●写真提供　Jリーグフォト（株）、フォート・キシモト
●発 行 日　2009年4月1日